

【概要】

ラフカディオ・ハーンにおける「クレオール性」の再読解 ——イナ・セゼールを中心に

廣松 勲

はじめに

複数の言語文化を横断したラフカディオ・ハーンの生涯において、マルティニック島での生活は比較的短い期間であった（1887年から1889年）。とはいえ、旧首都であるサン・ピエールに滞在したハーンは、ルイジアナや日本でのように民話や諺等の聞き書きを続けながら、当該地域の19世紀末の言語・文化・社会に関する貴重な資料を残した人物として知られている。本発表では、このようなマルティニックの社会文化的背景を確認した上で、この時代のハーンが残した作品群について簡単に紹介を行った。次に、当該地域におけるハーン受容の一つの事例として、ハーンのマルティニック滞在に関する作品を発表した作家・民族学者イナ・セゼール（Ina Césaire）の小説『私はシリア、ラフカディオ・ハーンの女家庭教師：1888年、マルティニック島サン・ピエールにおける言葉のやり取り』について、内容と形式の両面から分析を行った。

1. マルティニック時代のハーン

マルティニック島は1635年にフランスの植民地となってから、現在に至るまでフランス共和国の一部として存在している。1946年には大きな行政区画の変更が行われ、旧植民地のマルティニック島は（他にグアドループ島、レウニヨン島、仏領ギアナと共に）「海外県」としての地位を与えられるに至った。そのような歴史的背景を持つマルティニック島において、旧首都サン・ピエールは当時最も洗練されたフランス植民地の都市の一つとされ、1902年にペレ山噴火によって数万人の住民とともに焼失するまでは、「カリブのパリ」として知られていた。ハーンが滞在した19世紀末はサン・ピエールという都市の最後の輝きを放っていた時代であり、そのような時期におけるハーンの聞き書きは、現地においても貴重な文化的資料として理解されている。

ハーンが滞在した当時も、また現在においても、マルティニック島では、西欧人による植民地化の波を受けて、予期せずに多様な民族文化が併存するようになった。この併存状況は、特に言語において顕著に見られるような、所謂「ダイグロシア」として捉えることができる。つまり、マルティニック島の混交文化である「クレオール語」は、旧植民地宗主国の「フランス語」との関係において劣位の社会的地位に置かれる傾向があるのである。当然のことながら、1970年代以降の地域文化復権運動（特にクレオール語）の流れの中で、このような階層秩序に対して文化的・社会的な側面から多様な抵抗がなされてきた。しかしながら、政治的・経済的

側面においては、現在においても上記のような階層秩序を伴った言語文化の状況が払拭されたとはいえない。

このような歴史的背景を有するマルティニック島において、ハーン作品はどのように受容されてきたのだろうか。その受容状況については、ルイ・ソロ・マルチネル氏による先行研究に詳しいが、実際の所、現在のマルティニック文学界において必ずしも大きな影響を残したとはいえない。例えば、19世紀末から現在までに刊行されたハーン作品に関連する批評文や物語作品は、必ずしも多いとはいえないのである。とはいえ、例えば旅行記における「プリミティヴな」言語・文化・社会への寛容さ、民話・伝承の聞き書きへの関心等において顕著に見られる彼のロマン主義的視線は、マルティニック文学の揺籃期において、当該地域の言語・文化・社会的特殊性を書き記したという点において、高く評価されてしかるべきものであると考えられる。

このような受容状況において、とりわけ注目されるのは、セゼール一家によるハーン作品への反復的な応答である。ネグリチュードの詩人・政治家エメ・セゼールによる詩や民話（ハチドリの民話）の解説、その妻であり作家シュザンヌ・セゼールによる小説『ユマ』の演劇化（原稿は焼失）、さらにその娘の一人である作家・民族学者イナ・セゼールによる小説など、断続的とはいえ半世紀に渡ってハーンの作品に関わる作品を残してきた。とりわけ、2009年に刊行されたイナ・セゼールの小説的作品『私はシリア』は、ハーンの旅行記の一部を書き換えるという形で、単純なハーン作品の懐古的な紹介に留まらず、カリブ海域文学、延いてはラテンアメリカ文学にみられる所謂「文学的カニバリズム」（マリーズ・コンデ）に基づいた非常に興味深い受容様式の一つであると考えられる。

2. イナ・セゼールの研究・作家活動と『私はシリア』

それでは、イナ・セゼールとは、どのような作家なのだろうか？具体的な作品分析において参考となる範囲で、彼女の作家・民族学者としての活動を概観しておきたい。

彼女は1942年にマルティニック島の現首都フォール・ド・フランスに生まれ、両親は上記のように著名な文学者であり、政治家であった。姉妹には演劇人ミシェル・セゼールがおり、また叔父には音楽グループ「マラヴォワ」（幾つかの曲ではイナ・セゼールが作詞）のマノ・セゼールがいるなど、マルティニック文化の発展に多大な貢献をしてきた一家の出であるといえる。民族学者として活動を開始した彼女は、西アフリカの「遊牧プール族」の美学に関する博士論文を上梓している。その後、マルティニック島における口承文芸を中心とした民衆文化に注目し民話収集・書き起こしを行ってきた。そのような民族学的活動を続ける中で、徐々に民話分析の知見を利用した演劇作品を発表し始め、現在に至るまで主たる活動分野となる劇作に取り組むようになった。彼女にとっては、この「演劇」の世界は「民族学的な聞き書き」と「文学

作品の制作」とを融合させると同時に、カリブ海域文化の活性化にも貢献できる最も有効な方法であったのだろうと推察される。

このような彼女の作品における特筆すべき特徴として、主に次の2点が挙げられる。まず一つには、民話やその語りの形式に基づきながら、様々なジャンルのテキストが物語中に挿入される点である。例えば、物語の語り手は「ことわざ、民話、レシピ、歌詞、演劇的対話」といった種類のテキストを、登場人物からの聞き書きの結果として物語に挿入するのである。もう一つの特徴は、その使用言語にある。いずれの作品も基本的には「フランス語」で書かれてはいるが、しかし会話部分に限らず挿入部分においても、クレオール語で書かれた文章が現れることが少なくない。さらに、地の文におけるフランス語も、少なからずクレオール語の語彙・表現が織り込まれており、「クレオール語化したフランス語」と呼びうるものとなっている。

第7作に当たる『私はシリア』は、そのような特徴が存分に発揮された作品である。つまり、本作の物語は主に2人の女性登場人物の演劇的な対話によって構成されており、かつ対話部分に限らず地の文においても、クレオール語の文章だけでなく、その語彙・表現が多く盛り込まれたフランス語が用いられているのである。

このような構成と使用言語の特徴によって語られる物語は、端的に言えば、ハーンの旅行記の書き換えである。具体的には、『マルティニック小品集』（『仏領西インドでの2年間』収録）の「第11章 わが家の女中／XI. Ma Bonne」に登場する、女中「シリア」を主人公に据えた物語である。ハーン版のシリアは、「私」の生活を世話する「料理上手の女中」である一方で、民衆文化の重要なインフォーマントとして描かれていた。それに対し、イナ・セゼール版のシリアには名字が与えられると同時に（シリア・マグロワール *Cyrlia Magloire*）、従属的な意味合いを含む「女中 *bonne*」ではなく、より主体的かつ支配的な意味合いをもつ「女家庭教師／ガヴァネス *gouvernante*」と言い換えられている。さらに、ハーン版における人物造形と比べると、「ハーン」との対話において、シリアはより合理的かつ率直な考え方をする人物として描かれる。物語の舞台は、1889年にハーンが去った翌日のマルティニック島の当時の首都サン・ピエールであるが、厳密にはシリアがハーンと暮らしていた家が中心舞台となる。この限られた空間において、合理的で率直な家政婦（「女家庭教師」）シリアと皮肉屋の洗濯婦ルネリーズ・ベリュムール（*Renélise Belhumeur*）との間で交わされる思い出語りが物語の核を成している。

このような本作品の物語内容について、次のように要約できるだろう。つまり、「ハーン版では受動的なインフォーマントとして描かれたシリアが、ハーンによる聞き書きの作業やその結果を、自らの属する民衆文化として自らの言葉で語り直した物語」なのである。

3. 『私はシリア』における「書き換え」の方法

それでは、なぜそのような物語の「書き換え」が行われたのだろうか。仮説として、作者セゼールは、合理的なシリアと皮肉屋のルネリーズとの対話を通じてハーンの物語を書き換えることで、植民地状況の2項対立的な「パラレルな世界」(イナ・セゼール)ではなく、その狭間に生まれた別様の世界観を提示したかったのではないか。ここでは、この仮説について具体的な書き換え方法を検討しながら検証したい。

まず、物語構造と語り手の役割に注目するならば、本作の物語では、恐らく意図的に2項対立的な人物造形が行われており、複数の対立関係の軸が存在する(例: 男性/女性、白人/有色人、西欧人/植民地人、民族学者/インフォーマント等)。その結果として、本作品の物語構造は、「ハーンによる物語が、右の項に属する2人の女性登場人物の共同作業によって語り直されるという構造」になっている。つまり、本作品における「無名の語り手(≒作者)」は、このような語り直しの過程を物語として語ることによって、植民地における「パラレルな世界」の懸け橋の役割を演じていると考えられる。読者は本作の読書行為を通じて、物語の「語り直し＝書き換え」の結果として開示される、カリブ海域諸島のクレオール的世界観を体験することになるのである。

次に、このクレオール的世界観とはどのようなものであるのかを探るために、物語内容と人物造形について検討したい。まず、登場人物「ハーン」を加えた3人の主要な登場人物は、以下のように対照的な人物造形がなされている。

- ①ハーン: 知的で好奇心旺盛な白人男性; シリアとの生活を介して、西欧文化に依拠しながらカリブ海域的視線を取り込む。
- ②シリア: 合理的で率直な混血女性; ハーンとの生活を介して、カリブ海域文化に依拠しながら西欧的視線を取り込む。
- ③ルネリーズ: 直感的で皮肉屋の混血女性; カリブ海域の社会文化的状況に深く根付き、②を皮肉る。

本作品の物語では、シリアが語り直そうとするハーンとの生活に関する物語の信憑性についても、彼女の思い出語りを遮るルネリーズによって、幾度も疑いをかけられる。つまり、或る意味で、①ハーンと③ルネリーズという両極端の間で、ハーンとの邂逅の後に中間的存在になったとされる②シリアが物語の橋渡し役を担っているのである。さらに、2人の対照的な女性の「言葉のやりとり」によって、シリアが語り直すマルティニク島の民衆文化のみならず、ハーンが体現する西欧文化についても複眼的に描かれることになる。とりわけ、③ルネリーズによる皮肉や嘲笑は、どちらの文化における価値観・世界観にも絶対的には与しない②シリアという人物造形に貢献しているといえるだろう。

このような人物たちの「言葉のやり取り」の結果として出現する物語世界とは、所謂カリブ海域文化(ここではマルティニク文化)でも西欧文化でもなく、両者の文化的諸要素の交換・

喪失・統合の中で生まれるクレオール的世界観と考えられるのである。

4. おわりに

これまで検討してきたイナ・セゼールの『私はシリア』という物語は、ハーンの物語を複層的な方法によって書き換えられた結果であった。そのような物語を介して読者に開示されるのは、必ずしも西欧文化でもマルティニック文化でもない、クレオール的世界観であった。さらにいえば、イナ・セゼールはこのような語り直しの過程自体を物語とすることで、混淆文化である「クレオール的文化」が生成する過程そのものをも描き出したかったのではないだろうか。

ところで、このような「書き換え」の技法は、必ずしも本作だけに特徴的な物語技法であるわけではなく、イナ・セゼールの他の文学作品においても観察できるものである。そのため、なぜ、どのようにして「書き換え」の技法が、彼女の物語制作において中心的な役割を果たしているのかについて検討するためにも、今後の課題として、彼女の他の文学作品との比較検討を進めることとしたい。